

## ホフマンとステッラの関係とは

情報工学科 2年 K. S.

ホフマンが、意中の人ステッラの中に見た三人の女性から、本編ではほとんど語られていないステッラの人物像と、ホフマンとの関係を探る。

オランピアは物理学の産物であり、完璧な容姿と歌声を持つ、心が無い機械人形として描かれている。欠点のない人間は居らず、その欠点さえも魅力になりうるので、オランピアの容姿、歌は人間味がなく不気味である。しかしホフマンはコッペリウスから買った魔法の色眼鏡をかけているので、オランピアに心があり、自分に気があるお嬢さんと錯覚してしまう。この色眼鏡は、オランピアの可愛らしい姿に一目惚れしたホフマンが盲目的にオランピアを美化してしまい、眼鏡が壊れてその状態から覚めることを目に見える形で現している重要なアイテムである。これはホフマンがステッラに対して一時的に気持ちが盛り上がり相手も自分を想っているのではないかと期待するが、それは勘違いだと思い直したときに、今まで自分がステッラを美化していたということを潜在的に意識し、その気づきが色眼鏡として物語に絡んだと思われる。

アントニアは歌い続けると死に至る病を患う歌手である。ニクラウスに言わせれば彼女は芸術家であるが故に楽器の心を持つ、風変わりな女性ということになるが、他の二人と違いアントニア自身の心理描写がしっかりとなされているため共感しやすい。ホフマンは、歌わずに自分と生きて欲しいと願うが、結局ミラクル博士にそそのかされ、命を削って歌ってしまう。ホフマンも同じく芸術家なのだが詩よりも愛を取る性格なので、愛よりも歌を取ったアントニアとの間には温度差があるように見える。ステッラも歌手であり、ホフマンではなく歌を取る。実際にはステッラとは両思いなのだがホフマンはそれを知らないため、飽くまでホフマンから見たステッラが描かれている。

ジュリエッタは、男を誘惑して影や鏡像を奪う娼婦である。ダイヤモンド欲しさにダペルトウットの命令を聞き、偽りの涙をうかべてホフマンを騙し鏡像を奪う悪の手先であり、他の二人とは立場がまるで違う。ステッラの魅惑に陶醉し心奪われ、苦しい思いをしていることを逆恨みし、ステッラに振り回される自分を客観視し自嘲している。さらにこの物語の中でホフマンは人を殺めており、大袈裟ではあるが、ステッラのためならば人殺しも厭わないというほどに夢中になっていることが分かる。

三人に共通して言えることは、○ホフマンが彼女たちの気持ちを理解できて

いないことである。オランピアのように何も感じていないのか、ジュリエッタのように自分を騙すつもりなのか、または、アントニアのように自分を想いつつもより大事なもののために振り向いてくれないのか。ホフマンが、ステッラの気持ちが分からずにもどかしい思いをしていることがわかる。